

雲門禪師(うんもんぜんじ)

令和2年8月第4週放送

雲の門と書く雲門禪師は、中国、唐の時代の終わりにから五代の時代にかけて活躍した禅僧です。生まれは現在の上海の南、江蘇省嘉興こうそしやうかこうだと言われています。名前の雲門とは現在の広東省かんとうしやうにある雲門山に由来します。幼き時より聡明で志が高く、仏教書に親しみ、十代の半ばに出家されました。

二十代前半、睦州ぼくしゆう禪師の下で本格的な修行に入りました。睦州禪師の指導は大変厳しかったものの、そのお蔭で一人前の禅僧として歩み出す大きな糧を手に入れます。

雲門禪師は厳しい修行のもと、自身の境涯を深められました。

その後、睦州禪師の勧めもあって、雪峰せつぼう禪師の下に移り研鑽を重ねました。多くの修行僧と寝食を共にし、また懐の深い雪峰禪師の指導により、雲門禪師は禅僧として自らの境地を高め、ついに雪峰禪師の法を嗣がれたのでした。

やがて独立して雲門山で指導者となった雲門禪師は睦州禪師の実践力と、雪峰禪師の懐の深さを受け継ぎ、多彩な表現によって弟子達を指導されました。相手の迷いを即座に断ち切る言葉。相手の能力に応じた言葉。日常世界に即した言葉。これらは雲門の三句として後世に語り伝えられています。

では具体的に雲門禪師の残された言葉を見てみましょう。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

ある僧侶が雲門禅師に「お釈迦様の体とはいかなるものですか。」と尋ねると、「干からびた棒状の便だ。」との答え。これは仏様を有難がっていたずらに崇め奉るのではなく、自らが仏様として実践することの大切さを修行僧に気付かせようとした言葉だと考えられます。

またある僧侶が雲門禅師に「触れるもの全てを斬り尽くす剣とはどのようなものですか。」と尋ねると、「スパッ!」、「グサッ!」との答え。仏法の優れた働きとは、頭の中で分別（ぶんべつ）して理解するのではなく、あくまで目の前の日常世界でリアルに用いてこそという雲門禅師の思いが伝わって来るようです。そして修行僧達に、「修行以前は問わない。修行生活に入ってから的心境を語ってみよ。」と尋ねると、誰も答える者がいない。そこで雲門禅師自身が代わりに「日日是好日（にちにち これ こうにち）、毎日が好き日だ。」と答えたそうです。

とかく私達は頭の中であれこれ考える事に慣れてしまい、過去や未来の事に悶々とする事も多いものです。

雲門禅師の言葉は目の前の現実にもまず目を向け、そこを丁寧に生きることの大切さを私達に呼び掛けてくれているのではないのでしょうか。

— 終 —